



インドネシア・
スラバヤ工科大学
プログラム

SUSAP SUMMER 2024
2024年9月7日～9月24日

参加者プロフィール

飯島しのん (団長)

経済学部 3年



かわいいを愛する最年長
どぎついピンクと紫が好き♡なパッチリおめめ

小川笑奈

理工学部 2年



いつも笑顔の恋ガール
スタイル化け物な超努力家

中尾幸太 (副団長)

教育学部 2年



いじられ系黒一点
そこにいるだけでみんな笑ってる (特に本人)

田中智美

経済学部 2年



フレンドリーなムードメーカー
チャームポイントはほっぺた♡

伊藤祥子

教育学部 2年



用意周到頼れるみんなのお母さん
デコトラくらい光るバスがツボ。

古賀まなか

芸術地域デザイン学部 2年



萌え袖常備のあざと女
どんな環境でもやっていける AB 型

土井和奏
農学部1年



安定感抜群！のおもしろ女子
口癖は「ほんとにそう」

岩本明日葵
農学部1年



インドネシア研修の癒やし枠
味噌汁大好き！フルーツは丸かじり！

荻野和
芸術地域デザイン学部1年



お絵かき系不審者ルック
独特で謎な発言をしがち

プログラム概要

【期間】 2024年9月7日～9月24日

【留学先】 スラバヤ工科大学
マラン国立大学

【内容】 スラバヤ工科大学で実施される14日間のプログラム「CommTECH」で様々な国からの参加者とともに「インドネシアの多様性」について学ぶための様々な文化体験活動やグループワークを通じて課題解決型のプロジェクトに取り組む。

マラン国立大学ではインドネシア語、伝統音楽、伝統ダンス、伝統衣装、観光地の訪問、インドネシア料理などを体験できるアクティビティーに参加し、日本とは大きく異なる文化と生活様式を体験し、地域社会やグローバルな問題について学ぶ。

インドネシアについて

6つの宗教と多様な民族で構成される国で、インドネシア国内でも地域によって信仰する宗教の割合が異なります。17,500以上の島を持ち、島ごとにも文化、伝統衣装の違いがあり、多数を占める宗教の違いによって祝日が異なることもあります。



スラバヤ工科大学について

インドネシアで人口が二番目に多い都市・スラバヤにある工科大学で、QS World University Rankingによるとインドネシア国内で第6位、工科大学のみ

では第2位の大学です。1960年にインドネシア政府により正式に国立大学として認定され、その名を現在の“Insutitut Teknologi Sepuluh Nopember”とし、ITSと呼ばれています。この名は訳すと「11月10日工科大学」であり、学校の設立した日であると同時に、1945年のスラバヤの戦いにも由来します。

マラン国立大学について

東ジャワ州第2位の規模の都市、マランに位置する。教育学部を起源とする総合大学で、インドネシアにおける先進的教育研究の拠点となっています。

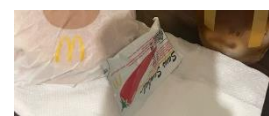
授業

スラバヤ工科大学で行われたCommTECHプログラムに参加しました。様々な国から来た参加者とともに、インドネシアの多宗教社会について講義を受けたり宗教施設を訪問したりして、最終課題としてグループごとにスラバヤの宗教事情を紹介する動画やポスターなどを制作しました。

マラン国立大学では現地の学生と料理や伝統衣装、ダンスなどで、インドネシアと日本の文化交流を行いました。

食事

国全体でイスラム教徒が多いため、多くの店でイスラム教の規律に則ったハラール認定がされています。食事は辛いことが多く、飲み物は甘いものが多いです。ハンバーガーなどのチェーン店でも、必ずと言っていいほどチリソースがついてきます。



市場・物価

インドネシアの日用品の物価は非常に安く、輸入品でなければ日本の30～50%の価格で買えます。外食もお手頃で、日本円にして500円程度で一食きちんと食べることができます。

交通手段

登校は大学側かホテルが用意したタクシーを利用していました。インドネシアはバイクの利用が多く、学生も多くがバイクで登校しています。GrabやGojekなどのアプリからタクシーやバイクタクシーを頼む人もおり、私たちも遠出の際にはよく利用しました。

「2週間でのインドネシア留学を終えて」

経済学部経営学科3年 飯島しのん

私はインドネシアへの留学を通じて、異文化理解の大切さを痛感した。日本で生活していると、宗教に触れる機会は少なく、「あなたは何の宗教を信仰しているの?」と尋ねられることはほとんどないと思う。また、宗教に対して恐怖や不安を感じる人も少なからずいるように思うが、これは無知から生まれる恐怖だと私は考える。私自身、無宗教であることから、宗教に関わることにに対してタブー視していた。しかし、インドネシアでの経験は私の考えを大きく変えました。



私たちが参加した ITS の COMMTECH プログラムでは、インドネシアの宗教と文化について学ぶ機会が多くあった。SUSAP などの海外での経験を重ねるたびに英語を話すことの抵抗は無くなってきている。しかし、宗教について英語でディスカッションすることは非常に難しく感じた。私は宗教の成り立ちや思想の違い、礼拝の方法について何も知らなかった。他の国から来た参加者たちは、自分の宗教について積極的に話し、他宗教に対しても理解が深いことに驚かされた。日本には多くの神社や寺、宗教に関連する観光地があり、その歴史や誰が建てたのかに興味を持つことはあっても、根本的な宗教について学ぼうとはしてこなかったことに気がつい

た。インドネシアなど多宗教が共存する国では大学に宗教コミュニティがあることがしばしば見られる。宗教コミュニティ内外の交流が盛んであることにも驚いた。宗教に対する考え方が異なっている、他宗教を尊重し、宗教の自由を認める姿勢には感銘を受けた。



私は日本に帰国してから、宗教に対する理解を深めるために勉強するようになり、宗教に対してさらに興味が湧いてきました。これが、私がインドネシアでの2週間で最も大きく変わった点だ。

今回の SUSAP は3回目の参加だったが、これまでとは違い、自分が最高学年で役職を任される初めての経験だったため、留学前は不安を感じることもあった。しかし、明るく愉快的な後輩たちに恵まれ、大きな問題もなく楽しい研修を終えることができた。祝日や放課後に他の参加者たちと出かけたり、授業中とは違うリラックスした雰囲気英語を話したりすることで、日常で使える英語表現も身につけることができた。毎回 SUSAP に参加するたびに、素晴らしい友人に出会いがある。海外に行かなければ絶対出会うことがなかった友人たちと知り合えることで自分の世界が大きく広がっている。私が海外に惹かれるのは、まさにこのような出会いや経験が要因だと感じる。

「インドネシア研修」

教育学部 2年 中尾幸太

今回私はインドネシアで、「CommTHCH」というスラバヤ工科大学での文化体験プログラムと、マラン大学での現地大学生との交流を行いました。今回はこのプログラム参加したからこそ気づけた3つの事柄について報告をします。

1つ目は失敗を恐れず挑戦することの大切さです。私は CommTHCH が始まってから数日間、英語を話すことに少し抵抗がありました。自分の英語が間違っていて伝わらないのではないかと、自分が話すことで会話が止まってしまうのではないかなどと考え始めて全く自分から話すことができなかつたのです。しかし積極的に交流をする友人の姿を見て、せっかくのチャンスを有効に使おうと決意しました。そこからは全体の前で質問をしたり、日本のジェンダー意識についての意見を述べたり、違う国出身の人と休憩時間にもコミュニケーションをとるなどアクティブに活動をしました。これらの体験によって今回の留学は想像していたよりもとても有意義なものになりました。

2つ目は違った文化、考えを受け入れることの大切さです。サンタマリア教会を訪れた際、聖職者の方は「イスラム教徒の人とはどのような話をするのか」という私の質問に対して、「『あなたの宗教は間違っている』などの話はしない。考えが違うのは当たり前であるから。」「宗教が違って根底の部分で私たちは人類であるという共通点がある。だから分かり合うことはできる。」と話をされました。私は留学に行く前まで、「宗教の調和」は各宗教が互いについて無関心になるになり、宗教グループごとに分かれて生活することで成り立っているのだろうと考えていました。しかし今回の留学を通して、真の「宗教の調和」というのはお互いに違いがあることを理解したうえでそれを受け入れ、違いを認めることだということに気が付きました。

3つ目は日本の歴史について知ることの重要性です。このことに気が付いたのは英雄記念館という、インドネシア独立戦争について知ることができる施設に行った時です。インドネシアの独立の大まかな

流れとしてはオランダが支配していたところを日本とインドネシアで協力して追い出し、その後日本が支配を開始。太平洋戦争が終了し、日本が撤退したのちにインドネシアが独立を勝ち取ったという流れでした。私はこの独立に向けての流れに日本が深くかかわっているにもかかわらず、日本がインドネシアで行っていたことについてほとんど知りませんでした。また、その後ラオス出身の友人と話し、ラオスの独立に関しても日本が深く関わっていたことを知りました。日本人が日本の戦時中の行いについて知らない。このことはインドネシアの現地の人、ラオスの友人にとっては信じがたいことだったのではないかと感じます。この体験から私は日本の人には戦時中の行いについて他国に謝る義務はないとしても、自国の犯した過ちについて知る義務があるのではないかと感じました。私は将来社会科の教員になりたいと考えているため、このことは深く心に刻んでおかなければならないと感じました。

今回のインドネシアでのプログラムでは、関わってくださった人にも恵まれ、とても有意義な体験をすることができました。今後も挑戦する気持ちを忘れずに語学学習をはじめとして様々なことにチャレンジしていきたいです。



「インドネシアでの日々が教えてくれたこと」 教育学部 2年 伊藤祥子

「私、全然英語、話せないけどねー」これは、インドネシアに行くことを周囲に伝えたときの、私の言葉である。これまでの英語の授業では文法を学ぶことが多かったせいか、英語で話す際にはきちんとした文法で話すものだという印象を持っていた。しかし、英語文法への自信はない。特に、慣れない相手と慣れない言語で話す状況で、正しい文法を使いながら話すことはほぼ不可能で、私が英語で会話するのは夢のまた夢の話。せめてものあがきとして、飛行機の中では英語音声に英語字幕付きで映画を見よう。そのような状況だった。

いざインドネシアに着くと、空港職員も、大学の方も、CommTECHの参加者も、人によっては英語に訛りが見られた。英会話に抵抗がある私にとって、慣れない訛りの英語との会話はとても苦しかった。一方で、「もっといろいろな人とコミュニケーションをとりたい！少しでも英会話力を身につけたい！」そんな思いに火が付いた。全力で話し相手の英語を聴き、ジェスチャーを使いながら自分の使える限りの英語を話すようにした。すると、想像以上に、ジェスチャーを使うことで自分の言葉がよりスムーズに伝わることを実感することができた。また、無理に正しい文法で話そうとするのではなく、自分が伝えやすい言葉を使うことが、コミュニケーションの役に立つとわかった。聞く時も、一生懸命に話し相手の言葉に耳を傾けると、よりスムーズに理解できるようになった。もちろん、その他の国からの参加者は、私たちの英語のレベルを考慮して、わかりやすい言葉を使ってくれるようになった。とはいえ、訛りは簡単に変化するものではないため、彼らの言葉を聞き取ることができるようになったことはとても大きな成長と言えるだろう。

最終課題でのグループ活動においては、「ジャワの活発なコミュニティの構築と異宗教間の調和」について話し合った。例えば、どのような発表形態をとるのか、発表の題名をどうするかといったことを、グループメンバーの会話を理解し、必要があれば自分の意見を述べた。また、日々の活動の中で、参加

者の方々と文化の違いについて会話をした。交通・食文化・宗教などを、言葉を通して日本ともインドネシアとも違う世界と出会うことができた。

このような会話を通して、自分の成長を感じた一方で、日本についての無知さや自分の考えの持ち方の甘さを痛感した。私は以前、日本人は日本文化についての説明ができない、と学んだ事がある。実際に参加者と話してみると、彼らは自国の文化・伝統・価値観を丁寧に説明してくれたのに対して、私たちは説明できるほどの知識を持っていなかった。また、グループ活動の際に、意見を求められても「なんでもよい」「どちらでもよい」といった曖昧な回答をしてしまったり、自分の意見がないうまく答えられなかったりした場面が多々あった。もちろん、日本人の特徴ではあるが、彼らとの会話に対してそのような特徴は必要とはされていない。このことから、海外の方々との交流では、日本について自分の言葉で説明する力、自分の意見を即座に持ちながら話を聞く力を身につけるべきだと感じた。

このインドネシア研修を通して、英語を通じた会話への抵抗感が消えたように思う。今回の研修において私に求められていたのは、「話せるかどうか」ではなく、「話そうとするか」だったのだろう。ジェスチャーや簡単な英語を使ってでも話そうとすること、これが、今回私の学んだ異文化交流における成果であると言える。



「英語を勉強する本当の意味」

理工学部 2年 小川笑奈

私は今回が初めての海外経験でした。そこで学んだこと、感じたことは数多くありました。まず、自分が宗教について無知すぎることです。今回参加した CommTECH というプログラムでは、インドネシアの多宗教を主題とした多文化共生について学びました。

様々な宗教の教会に行き、お話を伺い、学びを深めていく中で、自分には宗教に対する知識がほとんどないことに気づきました。そのため、ディスカッションで発言することができず、初歩的なことを質問していいのかとためらい、宗教について無知な自分が恥ずかしくてたまりませんでした。プロテスタントとカトリックの違いは何なのか、儒教とは何なのか、なぜインドネシアではムスリムが多いのか、など疑問を挙げたらキリがありませんでした。「日本は無宗教の人が多いため、知らなくていい、関係ない」と思っていたのですが、日本のような国はきつと少数であるため、この世界に生きている限り、必ず知っておくべきことだと痛感しました。他の国からの参加者は自分が信仰しているというのもあると思いますが、宗教に対して、きちんとした自分の意見を持っており、発言していました。その姿を見て、世界の人は宗教についての問題を重要視しており、その姿勢がグローバル化にもつながっているのだろうとつくづく実感しました。日本という平和で安心安全な国で暮らしているのは、こういう人たちの努力があってからなのかとも勝手に感じていました。この経験を通じて、私も自分の意見をしっかりと持つために学びを深めたいと思いました。

次に、英語を話すうえでもっとも重要なことは、「気持ちを強く持つ」ことだと、身をもって実感しました。おそらく、私は参加者の中で一番英語力が低かったです。そのため、英語での授業も、ほとんど聞き取ることができず、佐賀大学の友達に訳してもらえばかりでした。英語を聞き取れない自分に嫌気が差し、他の国の参加者と話しても理解ができなからと、話しかけることさえできなくなっていました。英語が母国語でない参加者も流暢に英語

を話しており、なぜ自分は話せないのかと、勝手に殻に閉じこもり、孤立して、落ち込むことがありました。その際、私は「これは日本の英語教育が悪い。自分は悪くない。」と他のせいにして、自分を変えようとしていませんでした。そんなとき、ホテルで一人の時間があり、様々なことについて調べ、今自分が抱えている問題について冷静に見つめ直すことができました。その結果、「誰しもが英語を簡単に話せるわけではない。全然英語を話すことができない外国人もいる。だから英語ができないことを恥じるべきではない。むしろ、自分は英語ができないと完全に認め、なんでも聞き返していくほうがいい。例えば日本に来た外国人が日本語を全然話さなくて、聞き返してきても、迷惑ではない。むしろ、知ろうとしてくれることが嬉しいと感じる。みんな同じ人間だ。強気でいこう。」という考えに至りました。あくまで私一人の意見であるため、偏った見方であるかもしれませんが、この気持ちでいるようになってから、徐々に他の参加者と話すことができるようになっていきました。そうしていくうちに、他の参加者の意見や価値観、普段の暮らしなどを聞くことができました。彼らの考え方はとても素敵で、自分が知らなかった世界を見せてくれました。とても刺激になりました。「もっとこういう人たちの考え方を知りたい。」などという思いから、彼らと話すために英語を勉強したいと心から思いました。今まで、自分にとっての英語とは試験、資格、就職のためのものでした。しかし、そうではなく、初めて、英語とは自分にとって新しい世界を見せてくれるような素敵な人と出会い、その人達と話すためのものだと気づくことができました。そのためにも自分は英語をもっと勉強したいと心から思うことができました。これが今回の留学で一番私にとって意味のあるものになったと思っています。

今回の留学は自分を成長させるとともに、日本では絶対得ることのできなかつた学びを得ることができました。これは自分にとっての財産になったのではないかと思います。この経験ができたことに感謝をします。



「Terima kashi~」

経済学部経営学科2年 田中智美

インドネシア留学のプログラムに参加したことは私にとって素晴らしく、驚きと学び、そして異文化のボーダーを感じさせない、感動が詰まった経験だった。別世界で生まれ育った人同士が共に時間を過ごし、インドネシアの豊かな文化や宗教の多様性を学び、感動を共有することでこんなにも短期間で家族のような絆で繋がることは想像もしていなかった。

「参加者全員と話す」という目標を達成するために、バスの中でも海外の参加者の隣に座ったり、ランチタイムに話しかけたりするなど、最初の頃は積極的だった。この積極性は全て好奇心から来ていたと思う。私のインドネシア留学は事前研修の時から始まっていた。好奇心が抑えきれず、渡航してから目に入るもの全てが新鮮で、口角が下がらなかった覚えがある。そうして積極的に話しかけていると、いつの間にか参加者間の壁を感じなくなり、それから毎日が楽しかった。

1番印象に残っているのは、夜から朝にかけて登ったブルモ山での思い出だ。山頂を目掛けてたまに休憩をとりながら坂を登り、朝日が昇るまで寒い夜を待った。今までで見た中で1番美しい朝日だった。思いやりや感動を、国境を越えた仲間と共有できることは本当に素晴らしい。

また、様々な文化交流をすることで、インドネシアの豊かな文化や宗教の多様性を、アクティビティな授業を通して知ることができた。この経験を通して、宗教や文化の違いを尊重し、心を開いて接することが、平和な共存のために重要だと気づかされた。

振り返ると、今回の留学は、自分の考え方に大きな変化をもたらした。バイトや遊びに時間を費やしていた自分に後悔をした。大学生活は4年間しかないことを実感し、残された2年半をどう過ごすかを考えたときに、英会話を上達させて世界の人々と関

わり、より多くの刺激を受けたいと強く思えた。

10ヶ国語話者で世界を旅するハーバード大学卒のアメリカ人、エンジニアを目指すフィリピンのAIマスターの大学生、自国についての理解を深めるために参加した大学生、このプログラムを主催した現地の大学生、そして共に参加した8人の佐大生など。2週間半という短期間での関わりから私は感銘を受けた。これらの出会いは海外旅行では培えないと思う。留学の良さを実感した。

今回の旅の一瞬一瞬をも忘れたくないために、一日ごとに日記をつけていた。この日記とインドネシアで残した思い出写真は一生の宝物だ。必然の出会いに感謝したい。



お気に入りの写真と頂上から見た景色（ブルモ山にて）



バイクタクシー



出店の「気にしない」店員さん

「SUSAP IDN 最終レポート」

芸術地域デザイン学部2年 古賀まなか

今回の研修に参加して感じたことを学習面、生活面の二点に分けて述べていく。

インドネシアは様々な宗教の人々が入り混じって生活する、いわゆる多宗教国であり、現地では宗教関係者からの新鮮な意見を学ぶことができた。日本で生活していると、宗教間での対立に関する情報は時々ニュースから得るといような現実味の少ない話である上、宗教について深く学んだり、議論したりする場が少ないように感じる。だが、今回の研修ではイスラム教のモスクやキリスト教の教会、仏教、ヒンドゥー教の寺院などを実際に訪れ、フィルターのかかっていないリアルな意見を直接聞き、その場で疑問を解決することができた。また、最終プレゼンテーションのおかげで異なる国の異なる宗教を信仰している人と自分の意見を交換するという貴重な機会もあった。この研修に参加するまでは、宗教に関する知識が不足していると考えていて、カトリックやムスリムの人と自分の意見を交換することは少し怖かった。だが、今回の研修でそれぞれの信仰者の立場の考えを共有し、理解することができた。今回出会った人々は全員が「平和が一番だから、宗教間で、宗教が理由で対立することは避けたい。」「みんな何を信仰しているか以前に同じ人間であるから、宗教に関係なく受け入れたい、関係を保ちたい。」と主張していた。もちろん世の中には様々な考えを持っている人がいるので、一概に言及することはできないが、このプログラムに参加し、多くの宗教関係者、信仰者の意見を学んだことによって、今まで持っていた宗教に対するたくさんの偏見が取り除かれたように感じる。

インドネシアで二週間生活したことで、インドネシアの良さだけでなく、日本の良さにも客観的な視点から気づくことができた。私が一番体感したインドネシアの良さは、人の暖かさである。現地での移動はほとんどタクシー移動であったが、そのタクシ

ーの運転手やふらっと立ち寄ったコンビニの店員さんなど全員がフランクで優しく、気さくに会話ができた。そのおかげでプログラムで立ち寄った学校の学生や、道を歩いているときにインタビューとして声をかけてくれた高校生など現地のインドネシアの人とも仲良くなることができた。また、インドネシアに行って私が実感した日本の良さは何事にも丁寧に取り組むことである。インドネシアは実用性や効率性が重視される文化であることにスーパーや飲食店を利用して気が付いた。しかし、どちらもお互いの独自の文化という点で評価されるべきであり、文化の違いを尊重する重要性を学んだ。さらに、二週間同じメンバーでプログラムに参加したことで、親しい友人も作ることもできた。プログラムメンバーでプログラム後にご飯に行くなど異なる国籍や宗教、年齢にも関わらず、とても楽しい二週間を過ごすことができた。

今回のプログラムで受け入れてくれたインドネシアの大学が秋に佐賀大学を訪問すると聞いたので、私も積極的に携わりたいと思い、その時を楽しみにしている。



「留学を通じて経験したもの」

農学部1年 土井和奏

私の SUSAP インドネシア研修に参加した目的は自分の英語力を知りたい、そして英語を学ぶモチベーションを高めたいと思ったからです。今回 CommTECH2024 を通して、伝えたいことが3点あります。

1つ目は、インドネシアと日本の違いです。今回の研修は大学で活動する（＝インドネシア人ではなく、ほかの国の人と活動する）機会が多かったです。まず、私はインドネシアの約8割の人がイスラム教を信仰している国だということを知ったばかりでした。が、実際現地に行くとヒジャブをかぶっている女性が少ないように感じました。実は、インドネシアは多宗教で、現地に行くとキリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、儒教の寺や教会がたくさんありました。なので、今回訪れたジャワ島にはイスラム教が少ないのかと思っていましたが、現地の方に聞いてみると、「東南アジアではそこまで厳しくない」と言っていました。また、食事の仕方も異なっており皿を持たずに食べていたので、「日本だけ皿を持って食べる文化があるのかな」と疑問が生じました。さらにインドネシアでタクシーに乗って、クラクションの回数や信号無視、無理な追い越し、白線を気にしていない点に驚きました。さすがは“世界一の交通渋滞”と呼ばれるだけあるなと実感しました。

2つ目は、海外なのに日本が身近にあるということです。スーパーには日本の商品、例えば、ポッキー、カップ麺のUFO、NIVEAなどが売ってありました。意外だったことは、外国人から「“様”は、どういう人に対して使うの？」や「この邦楽のタイトル知っている？」など質問をされたり、バスの中でカラオケをしていた時には、フィリピン人が日本の曲を歌っていたことです。やはり、日本商品や日本文化は世界から愛されていると感じ、うれしい気持ちになりました。ただ、質問をされて英語で具体

的に答えることができず、悔しい気持ちになったことを今でも覚えています。

3つ目は、滞在中の学びと経験です。今回の研修では、30人で授業を受けました。その中でグループ分けされ、最終的には5つの宗教についてプレゼンテーションを行いました。また、授業内容としては、インドネシアの言語について、食事について、歴史についてなど様々でした。特に印象的だったのは、現地の学生がしてくれた言語の授業です。生徒の発音が聞き取りやすく内容が頭に入ってきました。その時、「母国語が英語ではない国でネイティブのように話す人はかっこいいなあ、私もこういう姿になりたいな」と強く思いました。加えて、私たちが眠くならないように言語の伝言ゲームの時間もあり、そこでほかのメンバーとも仲良くなれた感じがしました。また、最後の週には、違う大学に行き、歓迎会を開いてもらったり、学生と車で滝を見に行き、夜はみんなで市街地を散策したりしてインドネシア人と話す機会が多く、たくさんのことを自分から聞けた気がします。それは2週間での大きな成長だと感じました。1週間目は、インドネシアの文化に慣れることに、英語を聞くことに精一杯で、全然自分から質問をしたり、自分から話せなかったが、周りのテンションの高さのおかげで外国に溶け込め、英語力、コミュ力が成長した気がします。この経験は、今後ぜったいに生きてくると思うので、この体験を活かし将来に向けて頑張りたいと思いました。



「留学報告書」

農学部1年 岩本明日葵

私がこのインドネシアの susap に参加し1 番印象に残ったのは、多様性の素晴らしさである。

最初にスラバヤでの CommTECH というプログラムに参加した。宗教の融和をテーマとし、プログラム参加者や訪れたモスクや寺院の方々とディスカッションを通して関わった。アメリカやフィリピン、ロシア、エジプトなど世界各国の異なる宗教を持つ人と交流を行うという有意義な経験であったと思う。活動の中で、日本で暮らしているときには意識することのない宗教間の関わり合いを感じた。大学内でも街中でも、異なる宗教を信仰している人たちが授業を一緒に受けたり食事をしたりしているのが日常の光景。それを見て、互いの文化を尊重しながら、違いを認め合いながら、暮らしているのだと気付かされた。また、印象的だったのは訪れたモスクやお寺の方々が自分達の宗教について語る姿である。どの宗教でも、熱心に話している聖職者の方からは自分達の宗教を誇りに思う気持ちが感じられ、感銘を受けた。プログラム中、あなたはなんの宗教を信仰していますか？という質問を度々受けた。日本ではそうそうする会話ではないだろう。信仰している宗教は大切な個人のアイデンティティの一つであるということに気がつき、日本の宗教観を見つめ直すきっかけにもなった。宗教以外でも、文化の違いを日々の生活の中で感じた。特に、時間に対する考え方は日本と他の国では大きく異なることを実感した。日本のようにきっちり決めて行動する良さももちろんあるが、たまには縛られすぎずゆったりと過ごすのも悪くない。プログラムを通して、自分の言いたいことを瞬時に伝えられないもどかしさや悔しさを感じる場面も多々あり、これから英語力を伸ばしていく必要があると強く思った。しかし、この約2 週間で自分の使える単語で会話することが出来るようになり、最後の方は楽しく会話することができたことがとても嬉しかった。言語の

壁を感じながらもなんとか伝えようとする気持ちの大切さ、そしてコミュニケーションをすることの楽しさは実際に海外に出てみたからこそ得られた気づきだったと思う。マランでは、2 日間という短い期間だったが文化交流等を通して仲良くなることができた。滝に連れて行ってくれたり、夜も繁華街へ一緒に行ってくれたりと快くもてなしてくれた。マランだけでなく、現地の方々は優しい方が多く、日本人にも親日的であったように思う。また、インドネシアに実際に行ってイメージと違うところも多々あった。私たちがスラバヤで泊まったホテルの前の道には信じられないくらい大きな家が立ち並び、富裕層の方々が住んでいることが窺えた。一方、動物園や町に出かけた時、物乞いをする人や路上で生活する人もよく見かけた。このように、収入の格差を感じる場面も多々あった。発展途上国で起きているこのような問題についても考え行動することが今後の私たちに求められていると思う。

このインドネシアでの経験は本当に有意義なものであった。これは一緒に色々なことを話して学んで体験した佐賀大学の仲間と、インドネシアで出会った世界の友達がいたからこそのことだし、多文化が共生することの素晴らしさを改めて感じた。そして、日本で暮らしているだけでは気づけなかったことを多く発見した。日本のこと、海外のこと、また自分自身についても新たな学びがあった。入学したばかりでの応募だったため不安も大きかったが、挑戦してよかったと思う。今回の経験をこれから先に繋げていきたい。



「インドネシア留学を通して」

芸術地域デザイン学部 1年 荻野和

インドネシアで約二週間過ごして印象深かったのは、街の様子だ。到着した日から、交通量の多い道路に驚かされた。そのほかにも、道ばたに座ってスマートフォンを触る人の多さ、店頭で椅子に座っている店員、どこのショッピングモールでも聞こえてくる生演奏など、日本で見ない光景を日常的に見かけた。街の雰囲気は緩く、その緩さが多文化、多宗教、多民族な国であるインドネシアの寛容さに通ずるように思った。私は、道路に面した飲食店の衛生面や虫の多さを除けば、インドネシアの緩い雰囲気がとても気に入った。また、店や街では日本のメーカーを多く見つけた。道路をすり抜けていくバイク、スーパーのお茶や洗剤、カタカナ表記の商品を見ることもあった。食べ物でも、たこ焼きやラーメンなど、日本のものを食べることができた。私は今回初めて海外に行ったが、日本では見られない街の様子の中に、自分が知っている日本の存在があることを面白く感じた。日本の外に出て初めて知る日本の姿があることを体感できたと思う。今回行ったインドネシアは同じアジア地域だったが、ほかの地域や別のアジアの国にも行くことで、比較したり、日本を別の角度から見たりしたいと感じた。

また、今回の留学で、英語をはじめとした外国語習得の重要性も強く感じた。インドネシア研修で参加した CommTECH プログラムでは、インドネシアについて様々な国の人と一緒に学び、最終プレゼンを行った。プログラムに参加する中で、どんなアイデアや知識を持っていても、言語がわからなければ意味がない、というのが一番の感想だった。言いたいことを伝えたり、内容をより正確に理解したりすることもそうだが、自信をもって話せることも、相手からの印象に関わる。出身の国や地域、声質、話し方などによって聞き取りやすさも違えば、言語の習得度で選べる単語の幅も異なってくる。今回の留学では英語を使うたびに緊張したり困惑したりして

いたので、もっと英語の技能や知っている単語数を増やしたいと思った。他の国の人とどうにか会話をつなぐ中で、言葉以外のコミュニケーション手段を活用することも学べたが、それ以上に、言語習得の重要性を感じる研修だった。

今回のインドネシア研修で、日本から出て異文化を経験するというステップを踏めた。英語の技能などこれからの課題は多くある。しかし、この研修に臨むまでほとんど知らなかったインドネシアについて、知れば知るほど好きになって、新しい視点ができたことが、自分の財産になった。今は日本とインドネシアを比べることしかできないが、今後もっと色々な国や地域に行って、より広い視点や深い考えができるようになりたい。



